NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY — BOOK III: THE SIX-YEAR STATE

第９章　機能限界の境界

THE FAILURE ENVELOPE

雪には国籍がなかった。

上部ステーションに降り積もるそれは税関の境界を通らず、旧式の光学読取機を備えたガラス張りの検問室を抜け、解体された冷却塔の部材で組まれた彫刻の継ぎ目に溜まっていた。ロイは黒い袖に触れた雪片が消えるのを見つめた。物質は破壊されずとも姿を失う。この山では、その区別のうえに数多くの制度が築かれているらしい。

荷運び人は、コールド・オーソリティが機械に人間の代弁をさせるのを嫌うと言った。窓口係は審査が二種類あると言った。ロイは物質的消耗を扱う方を選んだ。いま昇降機が運ぶ先の建物には、広告らしいものが一つしか見当たらない。「測定と判決を混同しないでください」と手書きされた掲示だ。

ナディラはそれを二度読んだ。「私が会った税関職員全員に見せたい規則ね」

イレーナは天井を見ていた。昇降路の両側に、薄いセラミック板を挟んで銅の導体が二本走っている。工業用モーターには太すぎないが、配列が妙に几帳面だった。

「アナログ時計よ」と彼女は言った。「独立した時刻基準。ネットワークに現在時刻を決めさせていない」

「そんなことができるの？」とナディラ。

「少なくとも、ネットワークを信用しないことは選べる」

違いを説明するより先に昇降機が停止した。

扉の向こうには灰色の布をまとい、柔らかな靴を履いた女が立っていた。若くも老いてもいない。左手はどこかの時点で再建されていたが、指の関節の継ぎ目より、喉元の白い瘢痕の方が目立つ。彼女の手には三つの記入欄を持つ紙札があり、二つは空白、一つだけにロイの受付番号が記されていた。

「ツェリン・ドルマ博士です。あなたには物質的な供用状態の検査を提供するよう指示されています。人格継続の申立ては必要ありません」

「誰からの指示だ」とロイ。

「あなたが署名した申請書からです」

「俺は署名していない」

「階下の証人用紙に印を付けましたね。窓口係はその印が存在することだけを昇降機で伝えました。用紙の内容は階下に残っています」

ロイは紙札を見る。角を横切る浮き出しの筋は途中で途切れていた。用紙の別の部分が、どこかにある。

「あなたは俺が誰か知らない」

「あなたが何を測らせることに同意したかは知っています。始めるにはそれで十分です」

彼女は厚い窓が続く廊下を案内した。片側には防雪柵で切り分けられた高原と、遠方に青く光る計算棟が見えた。反対側の実験室は、部屋の中にさらに部屋を設けた構造だった。すべての敷居に機械式カウンターがあり、身体が通るたび数字が一つ進む。戻す仕組みはない。

最初の実験室の扉でドルマは立ち止まった。「あなたを信託機構の知能システムに接続しません。解析は隔離された計測器群で行います。入力も出力も見られます。ただし、何年生きられるかを答える約束はできません」

「それでなぜ寿命検査と呼ぶ」

「人は正確な名称を嫌うからです」

「正確な名称は？」

「機能限界領域の研究。Failure Envelope Study です」

ロイは室内へ入った。

最初の装置は拍子抜けするほど簡素だった。クッション付きの椅子、三本の機械腕、周囲の測定器より小さな画面を備えた操作卓。イレーナはプローブの先端を観察し、触れずに身を寄せた。

「SQUID？」

「一部のヘッドはね。残りは普通の誘導ピックアップです」

「極低温設備はどこに？」

「床下です。先に言っておきますが、被験者にヘリウムを注入したりはしません」ドルマは少し笑った。「間違った資料を読んだ訪問者から、よく聞かれます」

ヘリウムという語に、ロイは深圳でシェンが最初に行った分析を思い出した。未特定の成分、常識外れの熱特性、軍事技術に由来しない構造。不完全な測定結果だった。それでも民間研究所から漏れ、政府を呼び寄せるには十分だった。

「今日の結果は誰に送る？」

「あなたに。当地の記録庫に残るのは手続きが存在した事実だけで、内容ではありません。安全用の封印した複製を三十日間保管しますが、それすら拒否できます」

「拒否する」

ドルマは紙札の欄を抹消した。「では複製はあなたの手元にしか残りません。なくせば、それまでです」

「どこかで聞いた話ね」とナディラが呟いた。

準備に六分、最古の測定器にロイの皮膚を皮膚として認識させるのにさらに三分かかった。圧力格子が肩の運動分布を描き、非接触電極が人工神経筋系の遅延を測った。共振アームは信号を内部へ強制的に流さず、密集する接続界面を地図化した。

ドルマが左手の人差し指を動かすよう命じると、目に見える運動が始まる前に準備信号が記録された。

「もう一度」

ロイは再び動かした。縦の波形が画面に現れる。彼の意図より早いのではない。装置が意図の発生を予測する時刻より早いのだ。

ドルマは眉を寄せ、時刻基準を変更した。新しい波形にも同じ不可能性が現れた。

「予測？」とイレーナが身を乗り出す。

「事前割当てです」とドルマ。「運動指令が確定する前から制御資源が配置される。未来を知っているわけではありません。直後に起きそうな運動の確率分布を保持し、局所感覚で確認してから実行する」

「つまり当てずっぽうか」

「すべての神経系は推測します。ただし、彼の推測にはたいへんな費用がかかる」

ロイは、下界で政府の機械を避けるために自分の何を消費したのか考えた。戦闘は多くなかった。だが、十分には戦っていた。

ドルマが操作卓の下のダイヤルを回す。「高出力時の現象も測れますが、補充できない資源を消費する危険がゼロではありません」

「やらない」とロイ。

「では刺激しません」

研究室なら協力を断られて不満を示すだろうと思った。ドルマはただ、紙札の別の欄を消した。

検査は導電性の代替塩水を満たした透明な筒へ移った。ロイの右前腕の周囲に無害な参照磁場が形成され、外部の模擬流体には別の磁場がかけられた。センサーは二つの反応差から、彼の皮下を循環する銀色の物質の特性を推定しようとする。

操作卓に三行が表示された。

REVERSIBLE RESERVE: RESTORING

ACTIVE CARRIER: DECLINING

SERVICE LIFE: NON-CONVERGENT

「三行目を説明しろ」

「計算による推定が信頼できる値に収束しないという意味です」とドルマ。「中途半端に知識のある人なら不死だと言うかもしれない。別の人は今にも崩壊すると。どちらも間違いです」

「なぜ間違いだとわかる？」

「測った事実から、そのどちらも導けないからです」

イレーナは生の波形を要求した。ドルマは半透明のフィルムに出力する。可逆的な予備出力はステーションへの移動中に回復していた。低負荷の運動と休息が回復を促したのだ。別の曲線、循環媒体の割合はごく小さな段差を作りながら下がっている。上がる段差は一つもない。

「これはエネルギー源ではありません」とドルマ。「むしろ高出力を可能にする媒体です。電荷の移送、熱管理、極度に精密な切替制御の兆候がある。どれか一つでは性能を説明できない。すべてを合わせれば、高出力は可能でも、それを持続可能にはしない人工生理系が示唆されます」

「製造できるか」

「できません」

「ここにできる者は？」

「私に本当のことを話すと信用できる人には、いません」

ナディラが椅子で身じろぎした。「それは『誰もいない』とは違うわ」

「ええ。その違いは重要です」

ロイは、現代の読取装置がまともに交渉できない古いメモリの内部に残ると言われる文書を思った。嵐の動きを計算できる世界が、彼の身体がわずかずつ消費する液体を作る術を知らない。進歩というものが互いにつながらない偶然の寄せ集めに思えた。

「どのくらい残っている」

ドルマは画面を見た。「今日測った区画容積に対する比率なら出せます。最初の充填量は保証できません。前回の初期化後に貯蔵槽が変更された可能性もあります」

「数値を言え」

「六一・八パーセント。相当の不確実性を含みます。それは、あなたの寿命が六一・八パーセント残っているという意味ではありません」

ロイは数字を胸中で繰り返した。数値であるというだけで権威を帯び、施錠された扉のラベルと同じほど役に立たなかった。

「ゼロになったら？」

「わかりません。切替格子が現在の伝導状態を失うのは、絶対的なゼロよりずっと前でしょう。すべての機能が同じ閾値で停止する証拠もありません」

「なら閾値を出せ」

「複数あるはずです。最大筋力の減少、反応時間の延長、自己修復性能の低下は推定できる。ただ、何を最初に犠牲にするよう設計されているかは予測できません。アクセス不能なファームウェアに優先順位が埋め込まれているかもしれない」

ロイの指が丸まり、また開いた。命令していない。しばらく手は、開いておく方法を忘れた男の手のように見えた。

「その優先順位は、俺の同意なしに変えられるのか」

ドルマは彼の目を見た。「それはソフトウェアの問題です。私は材料医学の医師です」

「誰にでも境界がある」

「良い計測器には、たいていあります」

研究室の外で鐘が二度鳴った。氷の下のどこかで計算棟が冷却負荷を調整した。廊下の気温が一度にも満たない幅で変わる。ロイにはわかったが、ほかの者は話を続けた。

ドルマは二つ目の囲いへ案内した。壁一面に微細亀裂の標準試料が並び、薄い板の欠陥を異なる光で読むことができる。彼女はロイの腕にある古い七角形インターフェースに触れず撮影した。ポートの一角に、普通の検査では捉えられないほど微細な印がある。

最初に幾何形状を理解したのはイレーナだった。「基準データ点ね」

「おそらく。ただし一つの身体のためではありません。廃止された較正標準群に対応しています。何度身体を再構築しても同じ基準線と比較できる」

「同じ人が生き残ったかもわかる？」とナディラ。

「いいえ。同じ座標系が残ったかどうかだけです」

ロイは面白くもなさそうに一度笑った。「入る都市ごとに、俺が彼らの考える男ではない理由が増える」

「私はそう言っていません」

「連中が言いたいのはそれだ」

ドルマは反論しなかった。画像を彼の方へ向ける。古いポートは、不可欠な何かを抜き取ったあとの穴に見えた。あるいは、身体の中で最も大切に保存された部位なのかもしれない。

「この身体を作った者はわかるか」

「いいえ。でも較正の刻印から、検査を許可された者なら探せるかもしれません」

「誰だ」

「コールド・オーソリティは古い標準コレクションの一部を継承しています。付随する身元情報まで所有しているとは限らない。個人の保管者が持つものも、同意契約で封じられたものもあります」

また同意の壁。また、名前を隠す見えない手。

ドルマは金属の引き出しから平たい封筒を取り出した。中には登録期間が連続して印刷された細長い紙がある。期間はロイが死んだと思っている年をまたぎ、記憶のない数年間まで続いていた。一区間の脇に、古い記録構文で注記がある。

MATERIAL CONTINUITY: RETAINED

PERSONAL CONTINUITY: NOT TESTED

LIFE-CYCLE AUTHORITY: EXTERNAL

「外部とは何だ」

「材料を測定した施設には、寿命サイクルの設定値を変更する権限がなかったということです」

「権限は誰に？」

「答えはこの記録の外にあります」

「どこに」

ドルマは紙を裏返した。位置コードと、その下に強く塗り潰され紙が傷んだ一行。

T.N.W. / CRYOSTACK / DEFERRED WITNESS

「クライオスタック？」とイレーナ。「実験室じゃない。保存と計算資源の賃借施設よ」

「同時に一つの管轄権でもあります」とドルマ。「ここでは同じ語が幾つもの意味を持つ。誰が決定したか認めずに済むように」

ロイは身を乗り出した。「何を保存している」

「測定記録、計算の割当て、環境履歴。ときには、人間に関する申立ても保存してほしいという依頼があります。信託機構は、それらを別々に保管することを学びました」

「俺についての申立てはあるか」

「それを尋ねる相手は私ではありません」

ロイは引き出しをレールごと折り取り、持ち去ることを考えた。可能だった。指先の下で金属がわずかに撓む。力を緩める。ここへ来たのは残り少ない液体を守るためで、書類棚との口論に費やすためではない。

三階下の部屋では、別種の審査が進んでいた。

岡京の安全な執務机の上で、川村は同じ政策の二つの表現が流れるのを見ていた。公開版は寿命六年の上限を安定化措置と呼び、非公開版は自律的活動にさらされる期間の短縮と呼んでいた。どちらにも七年目に何が起こるべきかは正確に書かれていない。

大臣室は統一性を求め、産業界は例外を求め、中央知能は政治的前提で加工されていない入力データを求めていた。

川村が望んでいたのは、かつて政府補助金を受け取り、それら三つの要求を時代遅れにしかねない研究をした女の存在を、機械に知られないことだった。

次長が扉脇に待っていた。「中央システムから、割当て寿命と予測される物質的耐久年数が一致しない理由の説明を求められています」

「政策上の選択だ」と川村。

「政策上の選択も内部整合性の監査対象になる、と」

「審査中だと伝えろ」

「伝えました。すると要請していない二度目の照会を作成しました」

川村は公開資料を閉じた。「内容は」

「未登録の人格継続事例へのアクセスです。深圳と南方の水利管区を結ぶ輸送異常の集団を特定しています。モデルは、その中に高価値の人工生命個体がいると推定しています」

「身元は？」

「まだです」

川村が今も歓迎できる、数少ない言葉だった。

彼は紙の写真を別のフォルダーに移した。何年も前の工業用水会議の写真。上品な服装の女が、雨水の入ったグラスに片手を置いている。透明であることを疑うようになった者の仕草だった。彼女はかつて川村に言った。政府が仕様書に寿命を書き込んだからといって、それが工学的限界になるわけではない、と。

彼はその研究に金を出した。現在の記録では、研究の可能性を承認しただけということになっている。その違いは行政上の防衛線となっていた。

「寒冷地信託のデータは区画化したままにしろ。連邦型の直接照会は禁止だ」

「大臣が命じる可能性があります」

「なら、結果の横に本人の署名をもらえ」

次長が去った。川村は写真と政策文書、そして政府が便利すぎて従順ではいられない機械を作ってしまったかもしれないという厄介な思考とともに残された。

高原では、ドルマが最後の査を提案していた。低負荷時の細胞組織と人工組織の更新モデルを作る検査だ。出力予備量を増やす必要も、記憶格子を開く必要もない。ただし静止した寝台に四十七分横たわらなければならない。

「その間はどうなる？」

「意識は保たれます。深層充電ではなく、観察です」

「誰かが入ってきたら？」

「起き上がれます」

イレーナは寝台を見た。「受けて」

ロイは動かなかった。「何がわかる」

「修復系が、通常の疲労による損傷より速く材料の品質を保っているかどうか。循環媒体の測定とは別です。消耗と老化を区別する助けになります」

彼は横になり、寝台が体重に合わせて動くのを待った。最初の熱パルスがフレームを走り、外の機械カウンターがかすかに鳴る。四十七分、白い天井を見ながら冷却設備の音の高さが変わるのを聞いた。

一度、遠くの突然のクリック音がロサンゼルスの屋上を思い出させた。その思考は二枚目の映像を伴わず去っていった。追いかける気はなかった。

終了すると、ドルマは三列の表が並ぶが終了日付のない用紙を印刷した。

「構造組織は通常の固定寿命曲線をたどっていません。更新されているもの、交換済みのもの、私たちの仮定では較正できないほど異質なものがあります。修復速度がプログラムによって制御されている証拠はありますが、予定表にはアクセスできません」

「この身体は二十五年持つのか」

「お答えできません」

「七年は？」

「それもわかりません」

「六年は？」

「六は行政上の数字です。実験室にお墨付きを求めないでください」

ロイは起き上がった。「その制御プログラムは変更できるのか」

「可能性はあります。変更権限と、私たちにはない理解が必要でしょう」

「誰が持っている」

ドルマは古いポートの画像を見た。「誰かがあなたを測定する手段を残し、別の誰かが供用寿命を定義する権限を保持した。両者が同一人物とは限りません」

外では雪が止んでいた。二つの光点が尾根に沿って並んで動く。航空機にしては遅く、普通の車両にしては速すぎた。受付の窓口係が扉に現れ、署名のない通知をドルマに渡した。

彼女は読み、折り畳み、窓へ目を向けた。

「何？」とナディラ。

「あなたたちの測定結果を、技術的には存在しない権限機関へ移送しろという要求です」

「政府から？」とイレーナ。

「名前を持つ不便さを免れたまま、政府の権限を与えられた計算からです」

ロイは立ち上がった。「送るのか」

「いいえ」

「なぜ」

「あなたが保管を拒否したから。ここには移送すべき測定値がありません」

ロイは手の用紙を見た。

「なら何を探している」

ドルマは答えなかった。研究室の裏を通り、古い計算スタックへ続く保守通路の扉を開いた。

「寿命制御の権限を探すなら、保留された証人——Deferred Witness が必要です。そして尾根にいる連中より先に着きたいなら、もう患者でいてはいけない」

ロイは印刷された結果を畳み、コートの内側に入れた。現在の身体について、これまで誰かに告げられた中で最も精密な事実がそこにあった。だが、あとどれほど持つかの答えはない。

深圳で目覚めて以来初めて、この無知が自分の質問の欠陥ではないという証拠を手に入れた。知識を分割する仕組みそのものに、答えの不在が設計されていたのだ。

ロイはドルマのあとを追い、暗闇へ入った。